



名古屋ハリストス正教会

なごや「聖歌」だより9月号2012

伝統って何？

* 正教礼拝の伝統を考える



今月の予定

聖歌練習 半田 9月5日(水)12時ごろから

名古屋9月9日代式後。毎聖体礼儀後のミニ練習も行います。

名古屋指揮当番

2日マリア松島 23日ピーメン松島 30日エレナ広石

4. 一致と多様性、聖神への信頼

その1 主教のカリスマ

五旬祭の日、聖神を受けた使徒たちは主の福音を宣べ伝えるために全地に派遣されました。彼らは自分が目撃し体験した、イエスの十字架と復活を、神の救いのわざの成就として伝え、教会を立て、感謝の儀式を行いました。最初は裕福な信徒の家の一隅などを借りていましたが、やがて専用の教会の建物をもつ教会も出てきました。どんなにささやかな場所、集まりであっても「二人または三人が私の名によって集まるところに私はいる(マタイ18:20)」という主のことばを信じ、危険をかえりみず集まり続けました。

ある程度信徒が増えると使徒たちは現地の共同体の中からふさわしい人を選び、カリスマ 按手によって特別の恩寵を与え、教会を任せて次の宣教に出てゆきました。使徒の働きを継承したのはエписコポスすなわち主教です(プロテスタンとの口語訳聖書では監督と訳されています)。主教に与えられたカリスマ 恩寵とは機密(ミステリオン・サクラメント)において「キリスト者の集まり」をハリストスの体として成聖すること、真実の教えの守り手となることです。神品致命者すなわち主教の殉教者を讃えるトロパリ(讃詞)には、「主教は使徒のならわし(生き方)と座(権威)を継ぐもの」と主教の役割が歌われています。個々の共同体は愛によって家族のように結束し、主教は家長のように信徒を導き、感謝の食事の儀式(エウカリスティア)を執り行いました。主教職の継承は使徒時代から現在まで連続と続いています。



五旬祭のイコンに示されているように、聖神の恩寵はペトロだけではなく12人すべての使徒の頭上に火の舌の形で降り注いでいます(使徒行実2章)。正教会では天国の鍵がペトルだけに委ねられたとは考えません。ペトルは使徒の筆頭として尊敬され、常に使徒を代表して発言していますが、聖神の恩寵は12人の使徒すべてに与えられ、使徒を継承するすべての教会に受け継がれ、従って主教の治めるひとつひとつの教会が公同(カトリック)で、完全な教会です。

天の王、慰むる者よ、真実の神^o、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善の宝蔵なる者、生命を賜ふ主よ、来たりて我等の中に居り、我等を諸の穢れより潔くせよ、至善者よ、我等の霊を救ひ給へ。(聖神を希求する祈り)

諸祈祷のとき、教会の活動を始めるとき、会合の時、必ず「天の王」を歌います。教会は聖神^oの導きがあつてこそ、自由でありながら道を踏み外すことなく働くことができます。

歌では「天の王慰むる者」でフレーズが切れているので、「天の王を慰める者」と誤解されている方がありましたが、「天の王、慰むる者よ、真実の神^o、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善の宝蔵なる者、生命を賜ふ主よ」まですべて、聖神^oを表すことばの並列です。

知って祈ろう—奉神礼は面白い

聖体礼儀は領聖に向かって上昇し続けてきました。ここに神がおられ、ハリストスご自身がその血と体を分け与えてくださることが確認されます。

主 イイスス・ハリストス我等の神や、爾の聖なるすまいと爾が国の光栄の宝座より眷りみ給へ、上には父とともに坐し、ここには見えずして我等とともに居る者や、来りて我等を聖にし、爾の権能の手をもって、爾が至浄の体と至尊の血とを我等に授け、又我等を以て衆人に授け給へ、神や我罪人を浄めて、我を憐み給え、

司祭 聖なる物は聖なる人に、

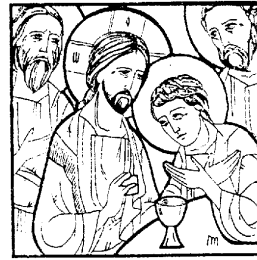
♪ 聖なるはただひとり、主なるはただひとり、
神・父の光栄を顕すイイスス・ハリストスなり、アミン

「聖なる物」すなわちご聖体は「聖なる人」にふさわしいと言われて、自分は「受けるにふさわしい」と言える人はいないでしょう。聖歌はすかさず、聖なる人はハリストスただ一人と切り返します。

税吏とファリセイの主日で、神に嘉せられたのは、律法のきまりや齋の規定をきちんとまもったファリセイ人ではなく、自分は神の前に顔を上げることもできない、それでも「神よ我罪人を救い給え」と叫んだ税吏でした。「聖なるもの」にふさわしい資格は、自分を顧み、そのふさわしくなさを知り、神に救いを求めることです。自力でふさわしさを準備できると考えるのはファリセイと同じ傲慢です。この後um難から離れることこそ領聖の準備です。そのために教会は禁食、痛悔、領聖予備規程の誦読などの伝統を保ってきました。しかしそれらは領聖のための「通行手形」、資格や条件ではありません。

司祭 神を畏る心と信とを以て、近づき来たれ、
♪ 主の名に依って来たる者は崇め讃めらる、
主は神なり、我等を照らせり

やがて王門が開き、ポティールを持った司祭が現れます。待ちに待った瞬間です。聖歌隊は「主は神なり、我等を照らせり」と歌います。「照らせり」はスラブ語やギリシア語では「臨めり（現れた、顕した）」で、今ここに、神が自らをおられるという意味です。かつて旧約時代には預言者でさえ顔を隠し、直接見ることすら叶わなかった神が、人となって現れ、この機密を制定し、今ご自身の体と血を、聖なる教会に、信じて集う者に与えてくださるのです。



領聖詞 キノニク

領聖詞「キノニク」とは領聖の時の歌です。主日祭日それぞれに領聖詞があり、主日領聖詞は「天より主を讃め揚げよ、至高きに彼を讃め揚げよ」（148聖詠）で、「ハリストスの聖体を受け」は復活祭の領聖詞です。最も古い領聖詞とされているのは、先備聖体礼儀の「味わえよ、主のいかに仁慈なるを見ん（33聖詠）」です。

古代の教会では最後の晩餐の絵のように主教と信徒が一つのテーブル（祭壇）を囲んで一緒に領聖していたので、領聖詞はひとつでした。ビザンティンにはいって信徒の数が増え、大きな聖堂が建てられるようになり、神品と信徒の領聖が区別されるようになり、神品領聖の時間を満たす必要が出てきました。ギリシアでは「天より・・・」の部分にメスマ（飾り）をたくさんつけて、延々と引きのばして歌うところもあります。

名古屋教会では「天より主を讃め揚げよ」と148聖詠を交互に歌っています。10世紀ごろのビザンティンの伝統です。アメリカでは子供たちが聖詠の句に即興のメロディをつけて歌っていました。

神品領聖の時間をうめるために色々なものが歌われてきました。革命前のロシアではこの時間に合唱コンツェルトや華やかな曲を演奏することもありましたが、最近は領聖詞をさっと歌った後誦経することが多いようです。日本ではよくイルモスが歌われますが、イルモスは早課の歌で、ここで歌うという指定は特にありません。

参考文献

『奉神礼』トマス・ホブコ著、西日本主教教区発行

『ユーカリスト』A.シュメーマン著、新教出版社

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>
詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料